

# 望ましい性格の形成

莊 司 雅 子



## 一、望ましい人間像

意識的であれ、無意識的であれ、教育者にして、子供を望ましい人間像に育てようと努力しないものはないであろう。ただその望ましい人間像とは、具体的にはどんなタイプの人間をさすかが、はっきりしないだけである。望ましい人間像は要するに望ましい性格をもった人の姿である。その性格の基礎は幼児期に形成されるから、幼児教育の重要性がますます認識されるに至ったのも当然である。では、性格とはどんなものであるか。性格とは、持続的な傾向となつたある個人の一定の行動様式を意味する。先天的な気質とか体質を中心として、環境と個人との相互交渉によって、次第にその人に独自の後天的な行動様式がつけられる。この後天的に形成されたその人の独自の行動様式が性格である。したがって、性格形成と環境との関係は重要な意味をもっている。

望ましい性格の特質として、英国の数学者であり、哲学者である

バートランド・ラッセルは次の四点をあげている。すなわち生命力・感受性・知性・勇気である。この四つの特質が統一される時、われわれの理想的な性格が得られる。ところで生命力または活力ハイヴリテイはまず身体の健康によって左右される。したがってわれわれはまず、健康の保育を考えるべきである。感受性は自分を世界の一部分として自覚させ、単なる個人的自己から社会的自己へ進ませるのにきわめて重要な特質である。望ましい感受性とは不快を感じずべきものに対して、強い不愉快の感情をいだし、快とすべきことを大いに愉快に思うような性質のものでなくてはならない。

つきに知性とは単に科学的知識や技術的知識をもつことではなない。もちろん知性的であるためには正しい知識が必要である。ただ知識をもつても無知の人と同様に知性的でない人間が多くいる。知性とは、真理に対して常に心が開かれてあること、即ち、たえず正しい知識を求め、受けいれていこうとする精神の傾向である。例え

ば、病氣や食事に關して、因襲的な考えにこり固まって、新しい科学的知識を取り入れようとしない人は知性のない人と呼ばれる。また知識をもつていても、その人がその知識を一つのトグマ(信条)として固執し、自分の知識を検討しようともしないし、さらに探求しようともしない場合は、彼は知性人ではない。

最後に勇氣とはギリシア人によれば、単に勇しくあるということではない。恐れるべきものを恐れ、恐れるを要しないものを恐れぬこと、すなわち不合理の恐怖をもたないことを勇氣とみている。ただ恐るべきものを恐れるというとき、子供のしつけに適應して考えると、危険や危害に対してやたらに恐怖心をあおりたてる心配がある。われわれは子供には危害や危険についてよく理解させ、敏感ならしめ、注意深く行動せしめるように導くのであって、決して、やたらに恐怖心を起させるようにおどしてはならない。

以上望ましい性格の特質として、生命力・感受性・知性・勇氣をあげたが、これらはいずれも家庭内における自然の生活を通して、家族の人間關係を通して、つまり幼稚園や保育所における集団生活を通して、無意識のうちにつちかわれるものであろう。

## 二、性格の形成

つぎに性格を形成していく条件について考察してみます。まず第一に遺伝と環境の問題である。人間の性格は、遺伝によってすべてがきまってしまうものでは決してないし、環境によって一切の性格が形作られるものでもない。つまり人間の性格は遺伝的素質と環境

とが相まって、はじめて形成されるのである。すなわち遺伝と環境との相互の働らきによって、性格が生まれてくる。遺伝的素質が全然なければ、いかによい環境を与えてもその性格はあらわれてこない。たとえば人間を攻撃的にする環境条件(欲求不満とか劣等感など)があつても、躁鬱質の陰気型というひどく消極的な遺伝的素質しかなければ、攻撃的な性格は形成されない。それはまた音楽的環境があつても、まったく音痴ならば音楽的才能が成長せず、音楽的才能の遺伝的素質の持ち主でも、音楽的環境が全くないところにおかれたのでは、これが百たないのと同様である。このように性格は遺伝的氣質を基礎としながら、環境の影響を受けつつ形成されてゆくのである。

第二に性格を形成する環境について考察しよう。人間の性格は、人間をとりまく自然的条件や、社会的条件や、文化的条件によって多分に影響されて、後天的な性格が形成されることは、いうまでもない。しかし、そのうちでも社会的条件、とくに家庭がその人に及ぼす性格形成の役割は実に大きい。人間の性格を形成する社会的条件のうち、もっとも重要な場所が家庭であるということは、多くの学者の一致した見解である。人は家庭の中に生まれ、その成長能力のもっとも旺盛にして、何でも身に体得していこうとする乳幼児期の大半を家庭の中で生活するのであるから、家庭において、ほぼ一定した行動様式が形成され、その後の性格を左右することになるのである。G・H・ミード、カーディナー、リントンおよびデューイ

は、性格の形成は人間とその環境との相互作用のみによると主張している。かれらの理論は、自我の本質とパースナリティの意味についての自然主義的な解釈の立場にたっている。そこには超自然的な解釈はない。デュロイによれば、パースナリティの存在は、植物が日光と土壌のなかにあるのに似ている。それは硬貨が箱のなかにあるのとは違う。G・H・ミードの社会的相互作用理論によれば、子どもは生まれたときには自我をもっていない。その初期の行動は拡散的である。幼児は自分がそれをいかにすることができると学習しなければならぬが、その学習の仕方は、かれは他人がかれに与える反応や、自己自身の内部で経験する満足から学ぶのである。幼児は生活初期の段階からその後のかなり長い期間にわたって、ほとんど自覚をもたないし、また自己観察もない。幼児の行動は基本的要求をじかに満足させようとして、自分から他人へ向うのである。幼児が他人を意識するようになるのは、かれの行為に対して他人の反応を期待し、その期待にしたがって自己の行為を規制したり、方向づけたりするときである。

幼稚園や保育所に通う幼児は、すべての点において未分化の段階にある。そして環境に感化され、影響されて分化してゆくのである。幼児は既に複雑な人間関係のなかに生きている。文化の世界に生活している。自然物や自然現象に左右されながら成長している。平和な家庭のなかで、家族の人々に守られてはじめて情操豊かな性格の基礎がつくれ、よい幼稚園や保育所に通いながら社会性がつ

ちかわれていく。また近隣や一般の人々とのつながりを通じて、民主的な社会人への第一歩を踏み出している。幼児は周囲の動植物の世界や、岩石の世界に強い関心をもっている。そして動植物の生活と人間の生活とを時には類比的に、時には対比的に考え類推し、また想像する。そして木の葉、草の実、花の世界に驚異の目を向け、おとなに気のつかないものを発見する。それだけではなくて、幼児は雲の行方を追ひ、風の力を感じ、水の勢いに驚く。また月の世界をあこがれ、星の輝きに微笑む。

一〇月は人も物も自然現象も、一年のうちでいちばん落ちつきを見せる月である。春にまかれた種、植えられた苗は、梅雨期の湿りと、はげしい夏の日ざし、そして大小の暴風雨とたたかいながら茂り、花咲いてきた。今や秋の爽りにはいっている。そして冬への準備にとりかかっている。天高く馬肥えるということほどおり人間も動物も、一〇月の快い季節に精神は落ちつき、身体はじょうぶになる。町や村ではお祭り、幼稚園や学校では運動会や遠足など、人と人との行きも忙しい。秋晴れの日は続き、夜空には月や星が美しく輝やく。一〇月はこうした人間や社会や自然の変化が他の季節に比べて温和で落ちついている。だから月は一〇幼児の心身を鍛錬するにふさわしい。このめぐまれた自然的な環境、人間的な環境を活用して、幼児に望ましい性格をつちかいたいものである。自然界に連れ出して大いに幼児の生命力を養い、知性をきたえ、さまざまな行事を通して幼児の感受性と勇氣の心をつちかいたいものである。(広島大学教授)